

石井伸男教授 略歴および研究業績

学 歴

昭和17年11月	東京都杉並区に生まれる
昭和36年3月	東京都立大学附属高等学校卒業
昭和37年4月	東京都立大学人文学部入学
昭和42年3月	東京都立大学人文学部哲学専攻卒業
昭和42年4月	東京都立大学経済学部学士入学
昭和43年3月	同大学同学部中途退学
昭和43年4月	東京都立大学大学院人文科学研究科哲学専攻修士課程入学
昭和46年3月	同大学院同研究科同課程哲学専攻修了 文学修士（第449号）
昭和46年4月	東京都立大学大学院人文科学研究科哲学専攻博士課程入学
昭和49年3月	同大学院同課程同専攻単位取得満期退学

職 歴

昭和49年10月	立正大学文学部非常勤講師 哲学特殊講義、哲学基礎演習担当（昭和53年3月まで）
昭和50年4月	東京都立大学人文学部助手（科学論・科学史講座所属） （昭和57年3月まで）
昭和52年4月	高崎経済大学経済学部非常勤講師兼担 社会思想史、論理学、外書講読担当（昭和57年3月まで）
昭和55年4月	中央大学法学部兼任講師 哲学担当（昭和57年3月まで）
昭和57年4月	高崎経済大学経済学部助教授 社会思想史、社会科学概論、演習（合同）、外書講読担当
昭和59年10月	一橋大学大学院社会学研究科非常勤講師 演習担当（昭和60年3月まで）
昭和63年4月	高崎経済大学経済学部教授 社会思想史、哲学総論、演習（合同）、外書講読担当 平成14年4月より Semester 制移行に伴い、担当科目を近代社会哲学、現代社会哲学、哲学、社会科学基礎論、演習（合同）、外書講読に変更（現在に至る）
平成12年4月	高崎経済大学地域政策学部兼任講師

	哲学基礎、近代社会思想史担当（平成15年3月まで）
平成13年8月	高崎経済大学大学院経済・経営研究科修士課程設置にあたり、大学設置・学校法人審議会教員組織審査において、㊦判定（社会哲学演習、社会哲学研究）
平成14年4月	高崎経済大学大学院経済・経営研究科修士課程教授兼任（社会哲学演習・社会哲学研究）（現在に至る）
平成15年9月	高崎経済大学大学院経済・経営研究科博士後期課程設置にあたり、大学設置・学校法人審議会教員組織審査において、㊦判定（社会哲学特別演習、研究指導）
平成16年4月	高崎経済大学大学院経済・経営研究科博士後期課程教授兼任（社会哲学特別演習、研究指導）

高崎経済大学での主な役職

附属図書館長	平成6年2月～平成8年1月、及び平成10年4月～平成12年3月
教養教育委員長	平成8年2月～平成10年3月、及び平成14年4月～平成16年3月
経済学科長	平成12年4月～平成14年3月
評議員	平成12年4月～平成14年3月
附属情報センター所長	平成14年4月～平成18年3月
経済学部長	平成18年4月～平成20年3月

賞 罰

賞	特になし
罰 平成19年4月	懲戒処分（減給、1ヶ月の間給料月額10分の1減） 理由「平成19年1月15日発生した高崎経済大学学生の自殺事件に関し、管下教員の指導監督を怠ったため」

学会等での主な役職と活動

【所属学会】 日本哲学会、社会思想史学会、唯物論研究協会、日本ヘーゲル学会、大学教育学会、社会文化学会、日本コトバの会

【役職及び活動】

1. 昭和46年8月 「全国若手哲学研究者ゼミナール」（現・哲学若手研究者フォーラム）結成よびかけ人（石井伸男・向井俊彦・村山紀昭・吉田千秋・吉田傑俊）及び第1回世話人。
2. 昭和53年11月 唯物論研究協会委員（平成12年10月まで）
3. 昭和55年10月 中央労働学院講師。土曜講座「哲学セミナー」担当（昭和56年1月まで）
4. 昭和62年10月 唯物論研究協会第10回研究大会（於・岐阜大学）にて研究発表。

- 論題「現代の国家と社会」
5. 昭和62年11月 グラムシ研究国際シンポジウム（於・東京）にて研究発表。
論題「社会変革と知識人—グラムシとレーニン」
 6. 平成2年5月 東京都立大学哲学会第14回研究発表大会にて研究発表。
論題「反映と表現—意識の二重の機能」
 7. 平成6年10月 唯物論研究協会委員長（平成8年10月まで）
 8. 平成9年12月 社会文化研究会にて研究発表。論題「花田清輝の共同制作論」
 9. 平成10年10月 社会思想史学会第23回大会（於・埼玉大学）にて研究発表。
論題「マルクス像の革新—『マルクス・カテゴリー事典』の編集を機に」
 10. 平成10年11月 社会文化学会運営委員（平成16年11月まで）
 11. 平成14年4月 日本コトバの会評議員（現在に至る）
 12. 平成14年10月 社会思想史学会第27回大会（於・専修大学）にて研究発表。
論題「マルクスにおけるヘーゲル問題を再審する」
 13. 平成17年1月 大阪経済大学学会主催シンポジウムで報告。
論題「田畑稔著『マルクスと哲学』論評」

研究テーマ

近現代社会の全体構造を体系的に把握する論理を明らかにしたいという意図を持って、私は主にヘーゲルとマルクスの労作から学びながら、その課題を解こうとしてきた。その一応の成果が6年前にまとめた『マルクスにおけるヘーゲル問題』であるが、この著作は勉強の中間総括に過ぎず、さらに未解決の部分を探ろうと試みている。

研究の途上で社会意識という問題領域の重要性に思い至り、とくに意識の機能が真理認識を目指すだけではなくて、価値意識を含むことを正当に位置づけようとして、当時の自分の考えを著書『社会意識の構造』にまとめた。

さらに、社会意識形成には知識層がはたす役割が無視できないが、戦中から戦後にかけてわが国で独自の知識人論を展開していた文学者花田清輝に託す形で、著書『転形期における知識人の闘い方—甦る花田清輝』を書き、そこではとくに知識人—民衆関係に新しい照明を与えようと努めた。

現在は、90年代からの世界の変貌をも視野に入れて、アーレント、ハーバーマス、ロールズ等に学びつつ、アソシエーション（自発的結合）型社会に必須の要件だと考えられる、市民的公共性の意義を明らかにしようとして、その周辺の問題群解明に取り組んでいる。

研究業績

I 著書

【単著】

- | | | |
|--------------------------|----------|--------|
| 1. 社会意識の構造 | 昭和61年12月 | 青木書店 |
| 2. 転形期における知識人の闘い方—甦る花田清輝 | 平成8年2月 | 窓社 |
| 3. マルクスにおけるヘーゲル問題 | 平成14年2月 | 御茶の水書房 |

【編著】

- | | | |
|--|---------|-------|
| 1. 講座・哲学第二巻「あそぶ・まなぶ」 | 昭和57年2月 | 学習の友社 |
| 2. 意識と世界のフィロソフィー（島崎隆と共編） | 平成6年12月 | 青木書店 |
| 3. ソ連邦崩壊と新しい社会主義像（村岡到と共編） | 平成8年11月 | 時潮社 |
| 4. マルクス・カテゴリー事典（石井伸男・伊藤誠・大藪龍介・田畑稔・正木八郎・渡辺憲正共編） | 平成10年3月 | 青木書店 |

【共著】

- | | | |
|------------------------------|----------|--------|
| 1. 現代の哲学 | 昭和54年5月 | 青木書店 |
| 2. 現代のための哲学①人間 | 昭和56年12月 | 青木書店 |
| 3. 哲学を学ぶ人のために | 昭和58年7月 | 白石書店 |
| 4. 戦後思想の再検討・政治と社会篇 | 昭和61年4月 | 白石書店 |
| 5. 社会思想の歴史 | 昭和62年5月 | 八千代出版 |
| 6. モダニズムとポスト・モダニズム | 昭和63年6月 | 青木書店 |
| 7. グラムシと現代 | 昭和63年7月 | 御茶の水書房 |
| 8. 日本文化の諸相（唯物論研究年報4） | 昭和63年8月 | 白石書店 |
| 9. 生きているグラムシ | 昭和64年1月 | 社会評論社 |
| 10. 意識論の新たな地平（唯物論研究年報5） | 平成元年10月 | 白石書店 |
| 11. もう一つの思想家像 | 平成2年7月 | 白石書店 |
| 12. 社会主義を哲学する | 平成4年5月 | 大月書店 |
| 13. グラムシの思想空間 | 平成4年11月 | 社会評論社 |
| 14. ラジカルに哲学する ⑤新たな社会への基礎イメージ | 平成7年3月 | 大月書店 |
| 15. 言葉がひらく哲学の扉 | 平成10年3月 | 青木書店 |
| 16. マルクスを読む | 平成11年11月 | 情況出版 |
| 17. アーレントとマルクス | 平成15年9月 | 大月書店 |

II 学術論文

1. ヘーゲルの反省の論理 昭和47年5月、東京唯物論研究会編『唯物論』第44号
2. ヘーゲルの弁証法的存在論と矛盾概念 昭和47年12月、都立大学『哲学誌』第15号
3. マルクスとヘーゲル—否定性の弁証法をめぐって 昭和49年4月、季刊『科学と思想』第12号、新日本出版社
4. 初期マルクスの「唯物論」把握 昭和51年5月、『唯物論』第6号、汐文社
5. 基本的人権と哲学 昭和51年7月、東京唯物論研究会編『唯物論』第49号
6. 生活主体としての身体・試論 昭和56年1月、季刊『科学と思想』第39号、新日本出版社
7. マルクスの唯物論概念 昭和58年5月、『唯物論研究』第8号、汐文社
8. ヘーゲルと自然法思想(1) 昭和58年12月、『高崎経済大学論集』第26巻第3号
9. マクスにおける意識の構造 平成元年3月、『高崎経済大学論集』第31巻第4号
10. 花田清輝と近代の超克 平成元年6月、季刊誌『思想と現代』第18号、白石書店
11. 花田・吉本論争における思想の構え 平成元年9月、『季刊・窓』創刊号、窓社
12. マルクス意識論の射程 平成3年8月、『情況』91年9月号、情況出版
13. 唯物論はどこへ向かうか? 平成4年1月、『理想』第648号、理想社
14. ヘーゲルの「意識」概念 平成4年3月、『高崎経済大学論集』第34巻第4号
15. 社会主義と正義論 平成8年5月、『カオスとロゴス』第5号、ロゴス社
16. ハンナ・アレントとマルクス—「労働」と「仕事」の区別をめぐって 平成9年11月、『高崎経済大学論集』第40巻第1・2合併号
17. 花田清輝の共同制作論 平成9年12月、『社会文化研究』創刊号

III 研究ノート等

1. 書評・G. Stieler ; Der Idealismus Kant bis Hegel 昭和46年12月、都立大学『哲学誌』第14号
2. 辞典項目執筆・塩田庄兵衛編『労働用語辞典』 昭和47年11月、東洋経済新報社
3. 解説論文・ドイツ古典哲学(上)、(下) 昭和48年11—12月、第三書房『初級ドイツ語』11月、12月号
4. 研究ノート・望月清司『マルクス歴史理論の研究』に関する批判的覚書 昭和49年4月、東京唯物論研究会編『唯物論』第46号
5. 辞典項目執筆・『コンサイス人名辞典・日本篇』 昭和51年3月、三省堂
6. 書評・古在由重編『知識人と現代』 昭和52年6月、『日本の科学者』Vol.12 No.6、水曜社
7. 論文・唯物論研究の組織問題・試論 昭和52年5月、『現代の唯物論研究』、合同出版
8. 書評・細谷昂『マルクス社会理論の研究』 昭和55年11月、『唯物論研究』第3号、汐文社
9. 評論・現代の課題にこたえる哲学への模索 昭和59年4月、『唯物論研究』第10号、白石書店
10. 研究動向・哲学 昭和60年1月、『社会科学研究年報』第8号、合同出版

11. 研究動向・哲学 昭和61年4月、『社会科学研究年報』第9号、合同出版
12. エッセイ・創立十五周年に寄せて 哲学若手研究者フォーラム『哲学の探求』第15号、昭和62年11月
13. 評論・社会主義論はどこへー論壇論調をめぐって 平成2年3月、『葦牙』第12号、みずち書房
14. 書評・『加藤正著作集第一巻』 平成2年3月 『思想と現代』21号、白石書店
15. 書評・幸津國生『哲学の欲求ーヘーゲルの欲求の哲学』 平成4年10月、東京唯物論研究会編『唯物論』第66号
16. 読書ノート・岐路に立つ社会科学（岩波講座「社会科学の方法」全12巻を通読して） 平成6年10月、東京唯物論研究会編『唯物論』第68号
17. レビュー・エッセイ・快感原則から神秘主義へー「脳内革命」ブームが意味するもの『唯物論研究年誌』第2号、平成9年10月、青木書店
18. 研究ノート・『資本論』における反映概念ノート（1）平成16年3月 『高崎経済大学論集』第46巻第4号
19. 研究ノート・『資本論』における反映概念ノート（2）平成17年3月 『高崎経済大学論集』第47巻第4号

IV 外国文献翻訳

1. Alfred Kosing カール・マルクスとマルクス主義哲学の将来 単訳 昭和45年3月、東京唯物論研究会編『唯物論』第41号
2. Getz Redlow 他著 弁証法的・史的唯物論（上）・（下） 共訳（第9章、第11章） 昭和47年6月、大月書店（全628頁）
3. マルクス＝エンゲルス全集・第36巻 分担訳（注366－542）昭和50年1月、大月書店
4. マルクス＝エンゲルス全集・補巻1 共訳（「ブシェの自殺論」、「自然哲学の概要」他）昭和55年12月、大月書店
5. Niklas Luhmann 著 社会システムのメタ理論 共訳（「社会システムとしての経済」を分担訳） 昭和59年11月、新泉社
6. Harald Bluhm 著 知識人の転換可能性ー旧東ドイツの場合 単訳 平成4年12月、『季刊・窓』14号、窓社